

支部の会のほか、お互いに行き来して、私もよく歩いたが、彼もよく歩いた。そうして珍種を発見しては、みんなを驚かした。

天草下島の福連木で、フクレギシダが再発見され、同時に、フクレギクジャクも発見されて、その後、兩種共それぞれ新産地が3ヶ所発見されたと思うが、日置さんは、冠岳でフクレギクジャクを、八重山で兩種を同時に発見する幸運に恵まれた。

それは、彼が大変熱心で、学究的な採集家であり、シダ一すじに山を歩いてきた賜であると思う。

元気だった彼も、昭和50年大分県の大会のあと健康を害し静養なさっていたが、53年には健康を回復し、霧島山麓での忘年採集会に元気な姿をみせ、盃を手にした笑顔をみせて下さった。彼は、ほんとうに焼酎がきで、朝からおみきをあげないと調子が出ないようであった。

56年5月初め、川原さんから電話があり、大工園さんと薩摩布計に行きたいというので、私が案内することになり、日置さんも参加なさるといっているので楽しみにしていたのに孫が来るからといって姿をみせなかった。

2日後、突然の訃報に接し、愕然とした。

無欲恬淡、飄然とした姿の日置さんは、忽然と、あの世へと旅立たれた。まことに、痛恨の極みである。ここに思い出の一端を述べて、心から哀悼の意を表したい。

○ 浜田 稔先生の御逝去を悼む (里見信生) Nobuo SATOMI: Obituary of the Late Dr. Minoru HAMADA

浜田 稔先生は1981年9月29日におなくなりになられました。先生は、昭和45年4月、本会に御入会下さいまして、本誌に対し、何かと御指導をいただきました。会員の方々とともに御冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

先生は、幼い時よりランを好まれ、特にツチアケビの発芽の御研究から、ランの菌根菌の分類同定という御仕事に進まれ、日本の南北の同じ種類から同じ菌が出るか、同地に生ずる他の種類の菌はどうか、Albinoのようなものはどうか、など多くの問題に熱意をもって取りくんで居られました。又、一方ではマツタケの調査にも従事されて、極めて多くの知見を御持ちでございました。石川県で、先生に御願ひして松茸山の調査をしていただいた事がありましたが、その際、私は先生の該博な御知見に接し、ただただ驚歎致しましたと同時に、学問に対する考え方を思い知らされた次第でした。

御奥様より御訃報をいただき、誤報であってほしいと思います。そのわけは、上述のように多くの御仕事をしておられるにもかかわらず、先生は、完全主義と申しましょうか、中途半端な御発表をなさいません。それだけに活字になったものが少ないように見えます。したがって、生意気ながら、是非書いて下さるよう申上ったことがありましたが、幽明相隔った現在、せん方ないことながら、冥土に届けとばかり、大声を張りあげて、おうらみを申し上げたい気持です。

○ 北海道の高山植物と山草 伊藤浩司著。B5版、230頁(内索引14頁)、定価4,300円(〒300円)。昭和56年6月、誠文堂新光社発行。

本書は、ガーデンライフの別冊で、5~172頁に、梅澤 俊氏が撮影された美しいカラー写真679枚が納められ、それぞれの種類について、生育地・全体の形・茎の高さ・葉の形・花期・花のつき方・花や花冠の形と色・果実の簡単な図が適切な記述がなされている。

北海道の高山植物をあつかった既刊書に、創土社発行の原 秀雄編：北海道の高山植物があるが、これは豪華本で価格が高く、たやすく手に入れることができないが、本書は、比較的入手しやすく手頃なものと言えよう。

本文では、I 北海道の植物、II 分類のむづかしい植物の見分け方、III 徹底したい自然保護の3項からなり、その末尾に参考文献が挙げられているが、その中には、本誌に掲載された論文が多数あり、北海道の植物について、本誌も大いに貢献することができたことをよろこばしく思っている。(里見信生)。

○ 新園芸教室 湯浅浩史著。11.5×19.5 cm, 236頁。定価980円。昭和56年7月25日、八坂書房発行。

家庭でやさしく楽しめ、話題性に富む、新鮮な内容のコラムとして、朝日新聞の家庭欄に連載したものを、単行本としてまとめられた。1977年10月25日、第1回の「見かけ違いが同じ仲間」から1979年12月26日、第104回の「花から根までおいしく」までの104篇である。内容は、著者が各地で見聞したり体験した身近な園芸をエッセイ風書きつづけたものである。したがって、各篇すべて楽しく拝見した。例えば、18頁の「金の成る木」を私もいつかつくって、知人に進呈してみたいと思っている。(里見信生)